



令和6年度 三股町立梶山小学校 学校だより(No19)

かじやま



かんだうがいっぱい じまんがいっぱい やる気じゅう分 毎日が楽しい 梶山小

R7.1.24(金) : 文責 校長

❖「自己決定力」の話(その2:「自己決定力」が育つ3つの時期)❖

■学校だよりNo.19では、自己決定が育つ3つの時期について考えてみたいと思います。フランスの児童心理学者:ジャン・ピアジェ氏の提唱から、私の経験も入れ込みながら、考えてみたいと思います。心理学を扱っていますので、記載内容が少し難しいかもしれません。

◆【2～7 歳】:～小学校 1 年生まで



ピアジェは、この時期には、子供の好奇心と調査意欲が発達する時期で、新しい対象や経験に対する強い興味がわくと同時に、自分の興味のあることに熱中するようになるという特徴が見られると言っています。

つまり、「自分の好きなものを見つける時期」ですね。「自己決定力」のベースにあるのは「好き・嫌い」です。自分の「好き」なものに対しては、知識や経験が自ずと蓄積されていく時期だと言われています。

好きなものを追い求めて、「どうしたいか、何をすべきか」の判断をすることが多くなり、「自己決定力」が鍛えられる時期だと思います。

◆【7～11 歳】:小学校 1 年生～5 年生まで

ピアジェは、この時期を、論理的思考が発達する時期で、自分の選択の結果がどうなったかを振り返ることもでき、少し難しい意思決定ができるようになり、選択肢の比較や結果の予測もできるようになるので、「自分で選択する楽しさを覚える時期」だと言っています。

この時期に、自分で選択する経験を積むことは、いずれ大きな決断をする時に必ず役に立つと思います。まずは、身の回りの小さな事例に対して、「選択する(決める)→結果を出す」といった経験を、なるべく多く重ねていくことが大事な時期ではないかと思います。もちろん、失敗もいっぱいしていいと思います。失敗からの学びもたくさんあり、次回の成功につながることもたくさんあるのですから。

◆【11 歳～】:5 年生～大人になるまで

ピアジェは、この時期を、因果関係(例えば、原因と結果)の理解が深まり、自分の1つの決定が、どれくらいの影響をもたらすかを考えられるようになり、「責任をもって、ものごとを決めることができる時期」だと言っています。

これまでとは違い、選択した結果どうなるのか予測し、自己決定によるプレッシャーを感じるようになります。こうしたことから、選択を迷ったり、決断を見送ったりと、自らの言動による責任について深く考え始めます。自信をもてない子供たち(*自己肯定感も関係あり)は、なかなか自己決定できない事も多くなるように思います。

このように、書いていきますと、ほぼ私たち大人世界と大きな違いはないですね。だからこそ、小学校高学年は、「自己決定力」を身に付けるとても大事な時期だと言えます。



偉人の名言・格言

☆◇◆ 苦しいから逃げるのではない。逃げるから苦しくなるのだ。

ウィリアム・ジェームズ(アメリカの心理学者)>